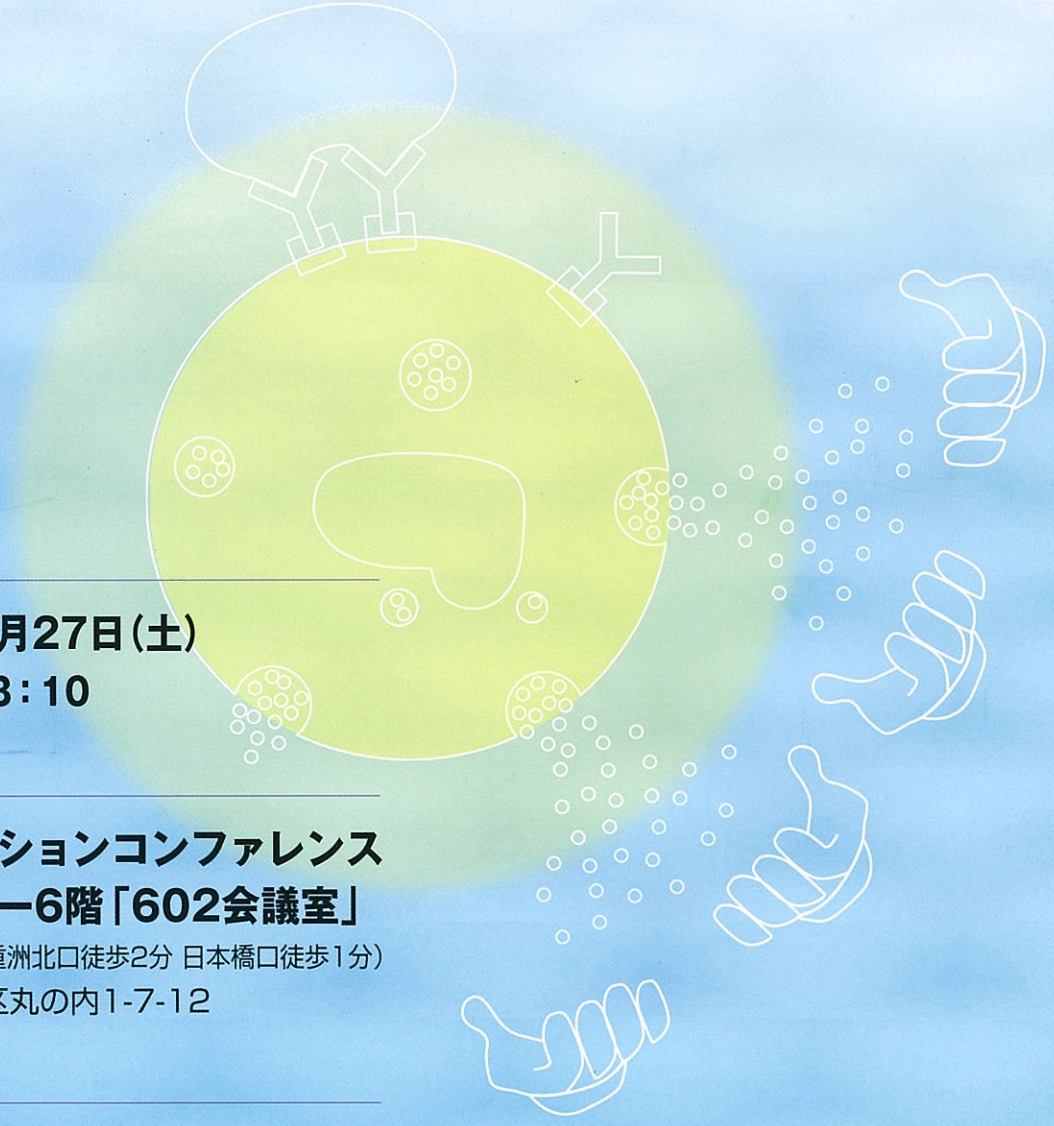
第28回
漢方免疫アレルギー研究会学術集会

講演要旨集

基礎・臨床フォーラム

消化管における漢方を科学する

消化管と呼吸器・免疫・アレルギーの接点



日　時

平成21年6月27日(土)
13:00~18:10

場　所

東京ステーションコンファレンス
サピアタワー6階「602会議室」
(新幹線東京駅八重洲北口徒歩2分 日本橋口徒歩1分)
東京都千代田区丸の内1-7-12

理事長

福地　義之助
順天堂大学

共催：漢方免疫アレルギー研究会
株式会社ツムラ

教育講演

免疫・アレルギー疾患の漢方治療

慶應義塾大学医学部 漢方医学センター
渡辺　賢治

漢方薬は免疫調整に働くものが多いことから、アレルギー疾患は漢方の得意分野の一つである。慶應義塾大学病院漢方クリニックにおいて、最も多い疾患はアトピー性皮膚炎であることからもそのことが伺える。また、気管支喘息、花粉症といったアレルギー疾患も漢方が得意とする対象である。

こうしたアレルギー疾患の治療を考えた場合、前面に出ている症状の治療（標治療法）とともに、体質的な治療を行うことが根本的な治療（本治療法）につながる。

本治療法がうまくいった場合には、そうしたアレルギー疾患から一生解放されることもしばしばあり、その意味において、西洋医学的治療と併用することは非常に意味のあることと考える。

一方、膠原病、炎症性腸疾患などの免疫学的難治性疾患も大学における漢方診療ではよく扱う疾患である。そうした点において、地域における総合診療の場とは少しその質を異にしている。膠原病に関しては、SLE、関節リウマチ、PSS、MCTDなどを診療するが、残念ながら、確実に漢方だけで治療できると断言できるだけのエビデンスを持ち合わせない。

中にはステロイド治療、もしくは免疫抑制剤との併用によって経過のいい症例や、ステロイドの離脱に至る例もあり、漢方の有用性を示す可能性はあるが、確実に治癒可能と断言することは困難である。よく用いる処方は補中益気湯であるが、その他十全大補湯、大防風湯、桂枝加朮附湯、薏苡仁湯、越婢加朮湯など症状に応じて使い分ける。

一例一例の集積から普遍的な治療法が開発されることが望ましいが、発表の中ではいくつかの症例を紹介し、漢方の作用機序に関する一考を述べたいと思う。